

アクティブ・ラーニング型の導入による「国語」の授業改善

Teaching Improvement in Japanese Language Education through the Introduction of Active Learning Methods

櫻 本 明 美・清 水 篤

1 問題の所在

「アクティブ・ラーニング」の言葉が、2008年3月の中教審大学分科会の審議のまとめとして公表された「学士課程教育の構築に向けて」に現れるのは、周知のとおりである。さらに、2012年8月の答申では、用語集で、定義を明確にし、そのための具体的な活動例も挙げている。それは、次のとおりである。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会能力的、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。¹⁾

このような教育施策に応じて、これからの学校教育を担う教員に求められる資質能力としては、「従来必要とされてきた不易の能力に加え、キャリアステージに応じた資質能力を高める自性律、情報を収集・選択・活用する能力や深く知識を構造化する力、学校を取り巻く新たな教育課題に対応できる力量など」と明示している。ここでいう「新たな教育課題」は、具体的には「アクティブ・ラーニングの充実、ICTを用いた指導法、道徳、英語、特別支援教育」が挙げられる。したがって、教員養成に当たっては、養成内容の改革の着眼点の一つとして、アクティブ・ラーニングの視点に立つ指導改善が求められ、教科に関する一科目である「国語」においても、当然、取り組むべき課題である。

そこで、アクティブ・ラーニング型の、「国語」の授業への導入を試みる。さらに、その有効性について検討し、今後の授業改善のための糸口を得る。本研究は、このねらいに迫ろうとするものである。ただ、現時点では、アクティブ・ラーニングを志向する授業の試みにとどまるものと予測する。そのため、小稿においては、「アクティブ・ラーニング」ではなく「アクティ

ブ・ラーニング型」としている。

2 国語科教育における「アクティブ・ラーニング」の意義

国語科でアクティブ・ラーニングの視点に立つ授業の必要性について、後藤顕一氏はこれから求められる資質・能力の育成を目指す前提に「日本の学校教育では、母語である日本語を使って、日本の立場で、日本語の文脈において、コミュニケーションをとり、思考していることを忘れてはなるまい。」²⁾と、国語の能力を位置づけている。そして、21世紀型能力の育成には、「ことばが基盤になっており、その根本は、国語科に係る要素『話す、聞く、書く、読む』であることを確認しておきたい。」³⁾と述べ、国語科の重要性に言及している。その授業改善については、アクティブ・ラーニングの考えを生かすことを期待し、次のように述べている。

一人一人が自分の考えをもって他者と対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや価値を創り出す力、次の問いを見付け、学び続ける力、健やかで豊かな未来を創る力、子供がそのような力の基盤を獲得できるよう、国語の授業にかかる期待は大きい。⁴⁾

ここで期待される「国語の授業」は、言うまでもなくアクティブ・ラーニングを意識したものと言える。

今後、変化の激しい社会を生き抜くための国語の能力を考えると、例えば「読むこと」の学習として、教科書教材を精読し、まとめをして感想の交流や発展読書などにつなげる方法が、必ずしもこれからの実生活に生きて働く力の育成につながるとは言いきれない。国語科におけるアクティブ・ラーニングの授業について、水戸部修治氏は、まずは、育成すべき資質・能力を「あくまでも試案」と断りながら、次の5項目に整理して提示している。⁵⁾

- ① 言語認識
- ② 言語の知識・技能
- ③ 言語運用能力
- ④ 主体的な課題解決と情報活用
- ⑤ 言葉に関する主体的な態度や国語を尊重する態度

そして、これらの資質・能力を育むにふさわしい国語科の学習活動には、「単に教材文を読み取らせたり、言語スキルを機械的に覚えさせたりすることが国語科のねらいではなく、今後の変化の激しい社会を生きる子供たちにとって必要な言葉の力を育むためにこそ、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学び、その成果を発信する、いわゆるアクティブ・ラーニング」⁶⁾が重要であると述べている。

また、中洸正堯氏は、アクティブ・ラーニングの語は用いていないが、「主体的な学びを励ますために」と題して、国語科の主体的な学びに必要な力を次の6項目に整理し提示している。⁷⁾

- ① 現象・事象に関して、問題を見出す力。国語科の場合、事象の中に、「言語(表現)」(通

常は教科書教材)を含める。

- ② 問題の答えを見出す力。国語科では辞典類(とりわけ国語辞典, 漢字辞典)の活用が重要である。
- ③ 答えを探索する過程で新たな「言語(表現)」に問題を見出す力。
- ④ この学びを, ある区切りまで追究する力。読書活動による展開。
- ⑤ ①~④のプロセスで考えつつあることを仲間と分かち合う力。
- ⑥ その時点での自分の考えをまとめ, 残された問題を問題として保有する力。

国語科では, 学習指導要領の趣旨を踏まえ, 言語活動を通して能力の育成を図る目的で授業が様々な工夫されているところである。それらの工夫には, たとえば説明文教材で, 取り上げられている情報が伝わりやすく述べられているかどうかについて, 展開のしかたや表現などを吟味する読み方がある。これは, 上記項目に当てはめてみると, ①や②が該当するものと考えられる。また, その延長線上に③, ④, ⑤, ⑥が位置づけられる。

このようにみていくと, 現在取り組まれている授業の工夫は, 活動の目新しさにとらわれるのではなく前述のような力の育成を目指すものである限り, 能動的な学びを支援するものと考えられる。富山哲也氏の言葉を借りて言えば,

現在, 主体的・協働的な学習やアクティブ・ラーニングが脚光を浴びる中, 言語活動に対するこの留意点は同様に重要である。すなわち, アクティブな活動を取り入れること自体が目的ではなく, それによって, 意図した国語の能力が身に付いたかどうかを厳しく見ないといけないということである。⁸⁾

と考える必要がある。つまり, 「意図した国語の能力」を身に付けるための工夫としてその意義が認められる。

3 「国語」の授業展開の実際

(1) カリキュラム上の位置づけ

さて, 授業改善を試みようとしている「国語」のカリキュラム上の位置づけを明確にしておく必要がある。この科目は, 本学児童教育学科専門教育科目群に属する。初等教育学コースの基幹科目であり, 小学校教員及び幼稚園教諭の免許取得を希望する場合には必修となっている。それ以外の場合は選択科目という位置づけである。3年次の小学校教育実習に備える実践的要素が色濃い「教科教育法国語」の履修につなげることも視野に入れて, 時間割としては, 2年次の秋学期に置かれている。したがって, 受講生は, ほとんどが幼・小教員免許の取得をめざす2年次生ということになる。今年度は, Aクラス21名, Bクラス40名, 計61名が受講している。

授業の目的は, 次の通りである。

「国語」(日本語)は, 「モノ」「コト」を認識し, その相互関係をとらえ, 考えを深めたり

想像豊かに感じ取ったりしたことを表現するのに不可欠なものである。この「国語」（日本語）の諸能力を育成する立場にたつことを視野に入れ、自らが豊かな言語生活者であり続けるための資質を磨くとともに、教材・授業・評価などについての知見を得ることをねらいとする。⁹⁾

ここに明記しているように、幼・小の教職を目指す学生がこの授業を通して国語教育の意義や方法に関する知見を得ると同時に、学生自身の国語力を伸ばすこともねらっている。このねらいは、これまでとほぼ同様である。

（２）授業の全体計画

先のねらいを達成するために、全15回の授業では、各時間のテーマを次のように設定している。

- ① 国語（日本語）の役割、及び国語科教育の目的や意義
- ② 「生きる力」としての「国語力」の内容と構造
- ③ 「文学（教材）を読むこと」の教育に関する知識理解
- ④ 「説明的文章（教材）を読むこと」の教育に関する知識理解
- ⑤ 教材の特性をとらえた「読むこと」の教育の課題
- ⑥ 「話すこと・聞くこと」の教育に関する知識理解
- ⑦ 「話すこと・聞くこと」の教育の課題
- ⑧ 「書くこと」の教育に関する知識理解
- ⑨ 「書くこと」の教育の課題
- ⑩ 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の教育に関する知識理解
- ⑪ 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」のうち「書写」指導の意義の理解と実技
- ⑫ 小学校国語科の学習指導要領の変遷、現行指導要領の内容等の理解
- ⑬ 国語科教育に関する新しい課題について
- ⑭ 個々の関心に基づく課題追究レポートのグループ交流（授業の総括レポート）
- ⑮ ⑭のレポートの全体でのプレゼンテーション（各グループ代表による）と全体討議 授業のまとめ

以上の内容は、当然のことながら、授業の1回目にプリントして配布し、授業内容や大まかな見通しを持つことができるようにする。また、この内容構成を示すことによって、現行の小学校国語科学習指導要領の内容構成について、意識化を図ることができる。同時に、受講生（以下、学習者と表記する。）が自らの国語力の自己診断の観点の設定にも役立てられると考える。

上記内容は、(1)と同じく、ほぼ昨年度と同様である。授業担当者も昨年度に続けて清水篤・櫻本明美の協働体制をとる。

（３）各時間の学習過程

これまでは、各時間のテーマごとに資料プリントを準備し、そのプリントを参照しながら講

義を進めて、ねらいに迫るという方法を基本としてきた。学習者は、具体的には、以下のような活動を通して課題を解決し、考えを深めていく。

- ① 「本時の課題」を確認する。
- ② 資料プリントや学習指導要領をもとに、課題に関する情報を得る。その時間に課題とする具体的な言語活動に取り組む。
- ③ 言語活動を通して考えたことや疑問点などを出し合い、考えを深める。
- ④ 「本時の課題」について、分かったことや考えたことなどをまとめる。
- ⑤ 本時の授業を通して気づいたことや印象に残ったこと、感想などを200字程度にまとめて「ひとこと感想」の用紙に記入し提出する。

上記の過程が、

- ・学習者自身が本時の課題を確認すること
- ・資料情報から必要な情報を適切に取捨選択すること
- ・学習者同士の話し合いによって考えを深めること
- ・毎時間の学習について自己評価をすること

などの活動を通して、学びをできるだけ主体的なものにしたいという考えによるのは言うまでもない。また、「ひとこと感想」は、毎回提出されたものに指導者のコメントを書き込んで返却し、個別のコミュニケーションや指導につなげた。学習者は、それを適宜読み返すことによって、それぞれに自己の学びのポイントを振り返り、学習の連続性と蓄積の実感を得ることにもなっていたようである。

上記の方法に加えて、第一回の授業時にノート作りについてもポイントをプリントにして配布し、共通理解を図るようにした。そこでは、ノートの機能には次の5通りの機能があることを踏まえて、ノートへの記入事項例として参考になりそうなものを提示している。

〈ノートの機能〉

- ① 練習的機能
- ② 備忘的機能
- ③ 整理機能
- ④ 探究的機能
- ⑤ コミュニケーションツールの機能

〈ノートへの記入事項例〉

- ① 今の自分の考え
- ② その時間に学んだ事項
- ③ その時間に分からなかったこと
- ④ 他者の発言を聞いて印象に残ったこと
- ⑤ 発言しようと思った考え
- ⑥ 本時に学んだことの今後への生かし方
- ⑦ 図表化したり、絵で表したりしたもの など。

しかし、この方法による場合、次のような点に課題があり、改善の必要があると考える。

- ・個々の予習、復習の状況が把握し難いこと
- ・一部の学生にとっては、受身のまま授業が進行していくこと
- ・学習者同士の学び合いの場が取り難いこと

そこで、上記の課題を解決するために、1時間の授業展開については、次のように改める。

- ① 「本時の課題」を確認する。(前時にも課題を確認し合う。必要に応じてポイントを伝えることもある。)
- ② 事前に作成した授業レポートをグループで持ちより、そのレポートの内容をもとにして課題意識を共有する。
- ③ 自分たちで設けた課題について話し合い、テーマについて広げ深め合ったことを整理してまとめる。(グループごとの発表にあたっては、いわゆる屋台形式をとる。そのため、模造紙大の用紙に話し合った内容のポイントのみを工夫して書く。なお、まとめて書く役割は、時間ごとに交代するよう事前に知らせる。)
- ④ 「本時の課題」について、分かったことや考えたことなどを5分間程度で聞き手(他のグループメンバー)に説明できるよう、グループ内で発表の打ち合わせや練習をする。
- ⑤ グループ間で発表し合い、課題について理解を深める。
- ⑥ 全体で本時の内容を振り返り、指導者の補足も加えてまとめる。
- ⑦ 次回の課題を確認する。

上記の過程で、②には、毎回、次のような内容の2通りのレポート提出を求めている。

〈第〇回 授業レポート〉

1 テーマについて

- ・ 次回の課題について、各自テーマを設定し、その理由を述べる。
- ・ テーマに関する文献や参考資料などを読んで考えをまとめる。

2 話し合ってみたいこと

- ・ 1で明らかにしたことをもとにして、分からないことや疑問に思うこと、もっと調べてみたいことなどを挙げる。授業では、この点についてグループでの話し合いを通して解決を図る。また、テーマについての考えを深めたり、視野を広げたりする。

*このレポートは、授業の予習として各自が作成してくる。それを、授業開始時にグループのメンバー全員(4~6名)と担当教員(2名)分をコピーして配布する。

〈第〇回 授業のまとめレポート〉

1 テーマについて

- ・ 授業で話し合ったこと、自分でさらに調べて分かったことなどを確かめる。
- ・ テーマについて、自分の考えを明確にする。

2 考えの変容について

- ・ 授業の前と後で、考えが変わったか、変わらなかったか。また、変わった場合は、どのように変わったのかを確かめる。

*このレポートは、授業の後の復習の意味をもつ。そのため、必要に応じて、授業の導入時に記入内容を紹介し本時の内容につなげたり、前時の内容を補ったり、質問に答えたりす

るなどのように活用する。提出は、担当教員（清水・櫻本の2名）分とする。

(4) 学習者の学びの実態とその考察

授業の出席者は、前記のとおり、2通りのレポートを作成している。学習者は、そういった課題を、実際にはどのように受け止め、その作成に取り組んできたのか。この点について明らかにすることは、アクティブ・ラーニング型授業の試みが、分けても先の水戸部氏の言う「主体的な課題解決と情報活用」能力、また、中洩氏が挙げる6項目の力に培う可能性の確認につながると考える。

そこで、全授業内容の一つ目の節目に当たる5回目の授業後に、学習者（当日、出席者全47名）に問いを試みる。授業そのものが対話型を目指したものであり、適宜、考えや思いを聞きながら進めてはいたつもりである。また、授業中のレポート交流（*1時間の授業展開②、③）及びグループ内での話し合いから発表準備（*同④、⑤）の過程の観察なども、学びの実態把握に資する。それらに加え、学習者の意欲についても、全体的傾向を把握する必要があるのではないかと考えるからである。したがって、授業中には見えにくい次の4点に質問をしぼる。

- | |
|-----------------------|
| ア 授業の進め方について |
| イ 事前レポート作成について |
| ウ 事後のまとめのレポート作成について |
| エ 授業中の討議（意見交流を含む）について |

そのうえで、授業へ取り組みの傾向をとらえるために、左記の4項目について簡単に記述する形で回答を求めた。

以下に、質問項目ごとに答えを確かめ、上記のねらいに照らしながら、考察を加える。

ア 授業の進め方について

「たいへん有意義だと思う」と答えているのは約43パーセントである。また、「有意義だと思う」は約53パーセントである。合わせると96パーセントとなる。この結果から、授業の進め方が学習者にとっては学びの充実感をもたらすものとして受け止められていることが分かる。

イ 事前レポート作成について

事前レポートは、授業時間ごとに提出し、同じグループのメンバーにも配布しなければならない。これは、いわゆる予習にあたるものである。その作成にかかる時間の平均を問うと、最も多かったのが「1時間から1時間半」で、約45パーセントとなっている。次いで多いのが「1時間半から2時間」で、約30パーセントである。2時間以上かけている者も約15パーセントを占めていて、ほとんどの学習者は、意欲的に取り組んでいることが分かる。

この時間に、課題に関する知識・情報を収集し、そこに自分のテーマを見つけて考え、それを文章化することになる。情報源としては、約72パーセントがインターネットに頼っている。次に多いのは図書館の文献や資料の活用であるが、これは、約26パーセントという低い数値である。すでに述べている通り、この授業では、「学びを、ある区切りまで追究する力。読書活動による展開。」をねらいの一つに挙げている。このねらいに照らして、事典類を含む文献に

よる情報収集に取り組むよう、助言が必要である。また、課題を解決するための情報収集にあたり、書店に足を運び、自分で文献や資料を買い求めるという学習者は、この時点では1名にとどまっている。確かに、情報収集の方法が多様化してはいるものの、この方法の良さも実感する機会をもってほしい。

事前レポートは、授業中の話し合いに活用するため、出席者全員がその有効性を実感している。具体的には、次のような点を挙げている。（*複数回答のため、10名以上が挙げている事項のみを記す。）

- ・自分が調べたことや考えを書いてきているので、話し合いに積極的に参加することができる。
- ・その時間の課題についてよく理解できる。
- ・自分で問題点を見つける力がつく。
- ・調べるのが面白くなる。
- ・国語教育への興味が深まる。
- ・論理的に文章を書く力が向上する。

以上から、事前レポートは、学習者の能動的な学びの場づくりにつながっていると言える。同時に、この授業の目的である「国語教育の意義や方法に関する知見を得ること」「自らの国語力を伸ばすこと」の達成に役立つものであると言える。

ウ 授業後の「まとめ」のレポート作成について

「まとめ」のレポート作成は、復習に当たる。この作成にかかる時間の平均は、「30分から1時間」が最も多く、約55パーセントである。次いで、「1時間から1時間半」が約30パーセントとなっている。これは、事前レポートに比べると短時間で書きあげていることを示している。同じグループのメンバーが作成した事前レポート、話し合いで取り上げられた問題やそのことについての様々な意見の想起、授業のノート、他グループのまとめなど、レポート作成のために利用できる資料が整っていることなどが、短時間でできる要因になっていると推察する。実際、「まとめ」のレポートに用いる資料として、ほとんどの学習者が同グループメンバーの事前レポートや授業のノートを挙げている。

この授業では、ノート作りにも意識して取り組むよう指導している。（p 参照）昨年度までは、ノートの提出を求め、ノート作りの意識化を図ってきた。しかし、このレポート提出を求めることで、学習者自身がノートの機能について実感を通して理解し、ノート作りに取り組んでいることが分かる。

この「まとめ」のレポートは、個々の学習者が毎回の取り組みに対する自己評価の機会としても意味をもつ。学習者は、「各時間の内容を振り返り、理解が深まった」（約94パーセント）と答えている。それに加えて、「文章を書くことに慣れてきた」（約66パーセント）、「問題点を見つける力が付いてきた」（約26パーセント）などの自覚を得ていて、そこに、「国語」におけ

る能動的な学びの姿を垣間見ることができる。

エ 授業中の討議（意見交流を含む）について

この授業では、学習者同士のグループ・ディスカッションやグループワークに多くの時間をかける展開をとる。これは、アクティブ・ラーニングの一般的方法とされているが、実際、学習者は、この方法を「学ぶことや気づきが多く、有効である」と、ほぼ全員が肯定的に受け止めている。この授業では、情報収集や話し合いたい問題を見つけることなどの準備をしてきているため、無理なく話し合い活動に参加できる。また、話し合いを通して、よりよい考えや新しい発想を得るなどの経験も、肯定的な受け止めにつながっているのではないかと考える。

4 まとめと今後の課題

『国語科重要用語事典』において、原田大介氏はボンウェルとアイソンがまとめているアクティブ・ラーニングの特徴を紹介している。それは、次の5点である。

- ①学生は授業を聴く以上の関わりをしていること
- ②情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- ③学生は高次の思考（分析、統合、評価）に関わっていること
- ④学生は活動（読む、議論する、書くなど）に関与していること
- ⑤学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること¹⁰⁾

これらの特徴に照らして、本実践の試みに関する考察の結果から、①、②、④については十分に対応していると言える。また、⑤については、上述の考察結果に加えて、授業の総括レポートの発表交流後に、例えば学習者Aが、次のような感想を記していることから、その特徴に応じるものになっていると考える。

今までの「国語」の授業で学んだことがより深い理解につながった内容のものや、自分がやってみたくと思えるような授業案もあり、とても面白かった。…中略…子どもたちが楽しいと思えるようにと考えて授業案を作成したが、楽しさにはいろいろあって、どのように子どもたちに楽しさを味わわせるかということをもっと考えなければいけなかった。何かを初めて発見した楽しさ、分からないことが初めて分かったことの楽しさ、壁を乗り越えることができたときの楽しさ、苦手を克服したときの楽しさなど、授業をつくるときに、もっと考えていきたいと思った。次には、楽しさだけでなくおもしろさにも重点をおいて考えていきたい。（下線は引用者による。）

文章の下線部分にある通り、Aは、他者の発表から学ぶ姿勢をもって発表交流に参加している。そうして、学ぶことの「楽しさ」について、自らの考えが至らなかったことに気づき、「おもしろさ」への価値認識を新たにしている。

ただ、③については、学習者個々の学習過程における丁寧な実態把握や評価、さらには、思考の変容状況の把握にまでは至らなかった。この点については、今後の課題とする。

「1 問題の所在」に述べている通り、ここで試みている実践は、授業改善の糸口を求める

ものである。本研究の結果を踏まえ、アクティブ・ラーニング導入上の問題点にも目を向けながら、授業展開のさらなる工夫に資する改善策を見出していきたい。

注

- 1) 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』2012.8 「用語集」
- 2) 後藤顕一「これから求められる資質・能力を踏まえた国語授業にむけての期待」『教育科学国語教育』NO.789 明治図書 2015.9 p.6
- 3) 注²⁾に同じ。p.4
- 4) 注²⁾に同じ。p.7
- 5) 水戸部修治「未来を生きる子供たちのための授業改革を」注²⁾と同書。p.9～p.10
- 6) 注⁵⁾に同じ。p.10～p.11
- 7) 中刈正堯「次期指導要領で明言してほしいこと 主体的な学びを励ますために」注²⁾と同書。巻頭言。
- 8) 富山哲也「子どもが主体的・協働的に学ぶグループ学習とは」『教育科学国語教育』NO.793 明治図書 2016.1 p.4
- 9) 平成27年度 神戸親和女子大学「国語」授業シラバスによる。
- 10) 高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編著『国語科重要用語事典』明治図書 2015.8 p.266